

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIV) 1—

茂木秀淳

[2 1 7 章] (=D. 2 2 4 章、8088-8147)

ビーシュマは言った。

- (1) しかし再びインドラは、話を続けるために²、蛇のようにシュツシュツと息をしている³ 彼(バリ)に、嘲笑しながら次のように言った。パーラタ族よ。
- (2) 種々の (? yat tad) 千の乗物に乗って⁴、親族たちに囲まれ、このあらゆる世界を熱しつつ、我々を考慮することなく、汝は進んだ (yāsi)⁵。(=MBh.XII.216.15)
- (3) そして(今日)自らのこの悲惨な状態を見て、バリよ、親族や友に見捨てられた汝は、悲しんでいるのか、あるいは、悲しんでいないのか。
- (4) かつて汝は、比類なき満足を得、もろもろの世界を自らの支配下においていた。今日のこの没落を、汝は悲しんでいるのか、あるいは、悲しんでいないのか。

バリは言った。

- (5) 私は、自ら (? ātmanah) この世界の時の進行を⁶ 無常と見なしている、それゆえインドラよ、私は悲しむことはない。この世界のすべては限りある故。
- (6) 生き物のこの身体はすべて限りがあるのだ、不死の王よ。それゆえ、インドラよ、私は悲しまないのである。この(ロバの身体⁷)状態は私の罪より生じたのではない。
- (7) 生命と身体とは⁸、死後⁹共に生まれるのである。両者は、共に成長し、共に消滅するのである。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIII)—』(信州大学教育学部研究紀要第 97 号 1999 年 8 月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿から用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[1902]: Hopkins, E.W., *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.)
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS. vol.24, pp.7-56, 1903.
- Hopkins[Epic Mythology]: E.W.Hopkins, *Epic Mythology*, Strassburg, 1915 (Reprint Delhi 1974).
- Gonda[Aspects]: J.Gonda, *Aspects of Early Viṣṇuism*, 2nd edition, Delhi-Varanasi-Patna, 1969.
- Buitenen[1975]: J.A.B.van Buitenen, *The Mahābhārata*, translated and edited, Books 2 and 3, Chicago and London, 1975.
- Meenakashi[1983]: K.Meenakshi, *Epic Syntax*, New Delhi, 1983.
- 中村 [1998] 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法原典解明」(上) 1998 年 平楽寺書店

²pravyāhārāya Ca., Cp., Cv.: pratyāhārāya kathāyogāya Cn. pravyāhārāya prakṣiptoktaye Cs. avyāhārāya avacanapradānāya

³niḥśvasantaṃ yathā nāgaṃ cf. Hopkins[Great Epic], Parallel Phrases in the two Epics No.143, p.421.

⁴P. yat tad yānasahasreṇa D. yānasahasrais tvam

⁵yāsi 過去の意味に用いられる現在形の用法については、Meenakashi[1983]p.155 参照。

⁶P. kālaparyāyam ātmanah D. kālaparyāyadharmatah

⁷ロバの姿をしたバリについては、Hopkins[Epic Mythology] p.133.13-17 参照。

⁸jīvitam ca śarīraṃ ca N. jīvitam jīvaty aneneti liṅgaṃ śarīraṃ sthūlam /

⁹P. pretya vai D. jātyaiva D. の「誕生によって」の方がわかりやすい。

- (8) 私は、誰にも支配されず、単独で、「この世での存在はこのような姿である¹⁰」と(いう認識に)達した。もしこのように認識するならば、認識している私にとって如何なる恐れが
あろうか。
- (9) 死は¹¹ 生き物の終局である。海が川の流れの(終局である)ように。このように正しく認識する人々は迷わないのである、金剛をもつ者よ。
- (10) しかし、感情と迷妄に心奪われ、このように認識することなく、智力 (buddhi) の滅した人々は、災難を得て苦しむのである。
- (11) なぜならば、智力の獲得によって人は (puruṣa) あらゆる罪を除去するのである。罪なき者は真実を獲得し、真実に住する者は平静となるのである。
- (12) しかし、そこ(真実)から引き下がり、あるいは何度も誕生する衰れな者どもは、意味なきことによって突き動かされ¹² 苦しむのである。
- (13) 目的の達成も目的なきことも、生命 (jīvitam) も死も、そして、苦楽の果報をも、私は厭いもせず、願うこともない。
- (14) ある人が誰かを殺す、ということは、殺された者が別の殺された者を殺しているにすぎない¹³。この両者とも、誰が殺し、殺されるのは誰かを知らないのである¹⁴。
- (15) ある人が、殺害し、勝利し、インドラよ、男らしく振る舞う¹⁵ としても、その人は(殺害や勝利の) 行為者ではなく、(別の) 行為者がそれを行なったのである¹⁶。
- (16) 誰が世界の生成消滅の両者を行なうのか。造られたものは、その行為によってのみ¹⁷ 造られる。それを¹⁸ 造るものは別の者である。
- (17) 地・風・虚空・水、そして五番目として火。生き物 (bhūtāni) はこれらを源とするのである。ここに如何なる嘆きがあろうか。
- (18) 大きな知識をもつ者、知識の少ない者、力ある者、力乏しき者、美しき者、醜き者、幸運な者、不運な者、
- (19) (これら) すべてを、知りたき時が自らの威力によって取り去るのである。それ(すべて)が時に支配されている時、このように認識する私に、如何なる苦があろうか。
- (20) 人は、(時によって) 焼かれたものを焼き、(時によって) 殺された者を殺すにすぎない。人は、前もって (agre) 滅したものを滅し、(あらかじめ) 得るべきものを¹⁹ 得るのである。

¹⁰p. tad idr̥śam idaṃ bhāvam D. na hīdr̥śam ahaṃ bhāvam

¹¹niṣṭhā Cn. niṣṭhā parā gatiḥ

¹²p. te 'narthair paricoditāḥ D. tair arthair abhicoditāḥ

¹³hatam hanti hato hy eva Cn. hatam nirjivam deham ... / etena dehasyātmatvam nirastam /

¹⁴あるいは、「殺す者、殺される者の両者とも、(このことを) 知らないのである」と解することもできる。この詩節に類似した表現が Kāṭha Up.2.19, BhG 2.19 に見られることは既に指摘されている (cf. Deussen p.294, 中村 [1998] p.578 注 14)。両者は内容的に同じであるが、MBH のこの詩節の内容は、上記の二箇所とは必ずしも同一とは言えない。ただし、C 句は、3 者とも同一の表現である。

hantā cen manyate hantaṃ hataś cen manyate hatam /

ubhau tau na vijānīto nāyaṃ hanti na hanyate // (Kāṭha Up. 2.19)

ya enaṃ vetti hantāraṃ yaś cainaṃ manyate hatam /

ubhau tau na vijānīto nāyaṃ hanti na hanyate // (BhG 2.19)

¹⁵puruṣāyate Cp. puruṣāyate paripūrṇo 'ham ity ācarati

¹⁶kartā tv eva karoti tat Deussen: sondern ein [anderer] Taeter ist es, der die Tat vollbringt.

¹⁷takṛtenaiva tat が何を指すかはっきりしない。「造られたもの」か。 Cp. kṛtena prākṛtena karmaṇaiva kṛtam Deussen: Von einem Gemachten wird jenes [menschliche Werk] gemacht

¹⁸「それを」 tasya 「造られたもの」を指すか。 N. tasya manaso

¹⁹naṣtam evāgre labdhavyaṃ agre は c 句に属するが、c 句の naṣtam のみならず、d 句の labdhavyaṃ をも形容すると解し得る。

- (21) これ(時)には島も²⁰ 向う岸も、こちら岸 (avāram) もどこにも見られない。この聖なる規定の (vidher divyasya) 終わりは、考えても、私にはわからない。
- (22) もし、私が見ている時に、時が生き物を消滅させないとすれば、私には喜び・高慢・怒りが生じるであろう、シャチーの主よ。
- (23) 汝は、人のいない家で粉がらを食べる私を知って、ロバの姿をしていることを指して、侮辱する。
- (24) 私は、望むなら、自分の姿を様々に変えるであろう。その恐ろしい姿を見て、汝は、私から逃げ去るであろう。
- (25) 時はすべてを取り去り、時はすべてを与える。時によってすべては保たれているのだ。インドラよ、勇敢さを (pauruṣam) 誇るなかれ。
- (26) かつては、私が怒ると一切が震えた、城塞の破壊者よ。しかし、私はこの世界の永遠の法則 (dharma) を知ったのである、インドラよ。
- (27) 汝もまたこのように観察すべし。自らを称賛することなかれ。力も(そこから生じる)権威も(?)²¹、決して自分の状態ではない。
- (28) 汝の心は、かつてと同様今日も、子供の状態にすぎない。(cf. Hopkins[Epic Mythology] p.133.42) インドラよ、観察すべし。そして最終的な²²認識を得るべし。
- (29) 神々、人間、祖先、ガンダルバ、蛇、ラクシャサ、これらすべては、私の支配下にあった。そのすべてを、インドラよ、汝は知っている。
- (30) 「ヴィローチャナの息子バリがいる方位を礼拝すべし」と、このように、羨望によって迷った認識をもつ人々は、私に(かつては)近づいたのである。
- (31) 私は、それを²³悲しむことはない。自分の衰退を(悲しむことはない)、シャチーの主よ。このように、私には、「私は指令者 (śāstr) に支配されている」という確固とした認識がある。
- (32) よき家に生れ、美しく光輝ある者が、家臣に囲まれつつも苦しんで生きることは、世間に見られる。そのような運命なのである。
- (33) 家柄悪しく、愚かで生まれ卑しき者が、家臣に囲まれつつ、安楽に生きることも、インドラよ、経験的に知られるところである。そのような運命なのである。
- (34) インドラよ、豊かで姿美しい女性が不幸であることが見られ、人目を引かない (alakṣaṇā) 醜い女性が幸福であることも、インドラよ、経験的に知られるところである。
- (35) インドラよ、汝がそのように存在すること、あるいは、我々がこのように存在することは、我々によって為されたのではなく、金剛を持つ者よ、汝によって為されたのでもない。
- (36) これは、汝の行為ではなく、他の者の行為でもない。またどうして²⁴私の行為であろうか、インドラよ。一方で富む者があれば、他方で富まぬ者もある。これは(時の)進行 (paryāya) によって為されたのである。
- (37) 私は、輝き、神の王に住し、吉祥をもち、威光をもち、私の上で咆吼する汝を見る。
- (38) もし、このように、時が私を掴んで放さないのとなければ²⁵、私は、汝を、金剛を持っているとはいえ、今にでも拳でたたき落すであろう。

²⁰ dvīpaḥ Cp. dvīpaḥ trātā Cs. madhye viśrāmasthānam

²¹ prabhavaś ca prabhāvaś Cn. prabhavaḥ aiśvaryaṃ prabhāvas tadāviśkaraṇam Deussen: Entstehung und Macht

²² naiṣṭhikīm Cp. naiṣṭhikīm buddhim ātmavidyām

²³ tad tad が何を指すか明らかではない。文脈から判断して、前詩節の「人々がかつて私に近づいたのに今は近づかないこと」か。

²⁴ P. tava nānyesām kuto D. bhavitāpy etat kṛtam

²⁵ P. etac caivam na cet kālo mām ākrāmya sthito bhavet / D. evaṃ naiva na cet kālo mām ākrāmya sthito bhavet / Deussen: Hätte nicht Kāla mich in dieser Weise uebermannt D. の否定辞 na が 2 ある読みに関して、Hopkins は次のように読んでいる。"I could kill you now; if it were not so, if Time did not (prevent)" (Hopkins[1902] p.119, fn.1.)

- (39) しかし、今は勇氣の時ではなく、忍耐の時が至っているのである。時は一切を存在せしめ、そして、時は（一切を）熟するのである。
- (40) もし時が、(かつて) 力強きダーナヴァの支配者であった私に近づいたのであれば、どうして咆吼し輝く他の誰かに近づかないことがあるう。
- (41) 汝の偉大な十二のアーディトヤすべての熟は私ただ一人によって、神の王よ、奪われたのである。
- (42) 私のみが水を引き上げ、そして撒くのである、ヴァーサヴァよ。私のみが、三界を熟し、そして（三界を）輝かすのである。
- (43) もろもろの世界において、威光あり自在者たる (īśvara) 私が、(一切を) 守護し破壊するのである。私が与え、受け取るのである。私が導き、制するのである。
- (44) 今や、その威光は私から離れたのである、不死の王よ。時の軍勢 (kālasainya) に飲み込まれた私には、一切は輝かないのである。
- (45) 行為者は、私ではなく、汝でもない。また他の者が行為者なのでもない、インドラよ。世間の人々は、時の進行に伴って、偶然に享受するのである。
- (46) ヴェーダを知る人々は、(時は) 一月と半月を住居とし、日夜によって困われ²⁶、季節を門とし、一年を戸口とすると²⁷ 言った。
- (47) ある人々は、この世の一切は英知によって考察されるべし、と言った。この五種の考察を私は五通りに述べるであろう²⁸。
- (48) ブラフマンは、大海のごとく²⁹、深く理解しがたい (cf. Hopkins [Great Epic] p.93, fn.1.)。 (それは) 始まりと終わりがなく、不滅であり、最高であると、言われている。
- (49) それ自身には特徴はなくとも、存在するものの中に (sattveṣu) 特徴を与えるものを、「永遠である」と真理を見る人々は考えるのである³⁰。
- (50) もろもろの生き物の (時の) 経過 (? viparyāsa) について、「(時は) 去った (gatavān)」と (人は) 考える³¹。なぜならば、来るべきもの (gamyam) は、プラクリティよりも高位ではないから (?), ³²その限りでは存在しないからである。
- (51) あらゆる生き物の行き先 (gati=kāla) に行くことなく、汝はどこに行くのか。走る者によっても捨てられず、止まっても捨てられないもの (時)、それをあらゆる感官は五種の仕方では³³ 見ることはないのである³⁴。

²⁶ahorātrābhisamvṛtam N. ahaḥsamjñai rātrisamjñaiś ca ṛtubhiḥ samvṛtam Deussen: dessen Gewand Tag und Nacht

²⁷P. varṣamukham D. vāyumukham Ca. vāyumukham ity apapāthaḥ kālopādhitvābhāvāt Cn. varṣamukham iti pāṭhe, varṣatīti varṣo dharmameghākhyam dhyānam tad eva mukham yasya Cp. vāyuḥ saptaskandha āvahaprahādirūpo mukham ādir yasya tam īśvaram āhuḥ Cs. vāyumukham vāyuśabdāt samvatsara ucyaṭe, vāyuvat satatagāmitvāt / samvatsaro hi kālasya pradhāno 'vayavaḥ, tena tasya mukhatvena nirūpaṇam /

²⁸asyāḥ pañcaiva cintāyāḥ paryeṣyāmi ca pañcadhā Cn. asyāś cintāyāḥ pañcaiva cintyān viṣayān annamaya-prānamayamanomayavijñānamayanandamayān kośān pañcadhā pratyekam pañcaprakārān pakṣadvayaśiromadhyadeśapucchākhyapañcāvayavaviśiṣṭān paryeṣāmi śrūtāv avagacchāmi Deussen: [nach Tait.Up.2, wo jede der fünf Hüllen des Brahman fünffach zergliedert wird] noch fünffach umschreiben.

²⁹mahattoyārṇavam Cn. mahattoyārṇavam pārāvārāśūnyārṇavatulyam, salila eko draṣṭā bhavati (Br.Up.4.3.32) iti śrutyā Cs. mahad brahmeti mūlaprakṛtiḥ uktā /... / akṣarāśabdāḥ puruṣavacanaḥ / puruṣaḥ vyaṣṭībhūto jīvātmā prakṛtiḥ vyaṣṭībhūtaḥ rapañcaḥ

³⁰manyante dhruvam evainam Cv. manyante 'dhruvam evainam ity atra, enaṁ jīvam adhravam manyante

³¹P. manyate gatavān iti D. kurute bhavagavān iti

³²P. na yasmāt prakṛteḥ paraḥ D. na yasmāt prabhavet punaḥ この詩節は、P. と D. は大きく異なる読みをしているが、P. の prakṛti の意味が判然としない。

³³pañcadhā Cn. pañcadhā pañcabhiḥ pramāṇa-viparyaya-vikalpa-nidrā-smṛtyākhyaiḥ prakāraiḥ

³⁴Deussen は Iṣa Up.4 の参照を指示している。当該箇所は次のようである。

anejad ekam manaso javīyo nainad devā āpnuvan pūrvam arṣat /
tad dhāvato 'nyān atyeti tiṣṭat tasminn apo mātariśvā dadhāti /4/

- (52) ある人々はそれを火と言ひ、他の人々は造物主である、と言った。また他の人々は、季節・一月・半月と言ひ、一日、そして、瞬間と言ひ、
- (53) 午前・午後・正午とも、また一時間とも、唯一の存在者を多様に言っている。この世の一切を支配している者、それを汝は、時と認識すべし。(cf.MBh.XII.200.29, Hopkins[1903], p.16.)
- (54) インドラよ、汝のごとく、力と精力を備えた何千という多くのインドラが去つたのである、シャチーの主よ。
- (55) 力あふれ、力すぐれた神の王たる汝インドラも、時が至れば、大きな精力をもつ時が静めるであろう、
- (56) この世の一切を受け取る者である時が。それゆえ、インドラよ、静かにあるべし。私によつても汝によつてもまたかつての人々によつても (pūrvaiś ca)、それは越えられないのである。
- (57) この最高の王の繁栄を獲得して、汝は「(繁栄は) 私のもとにとどまっている」と認識するであろうが、それは誤りである。それは、一箇所には止まらないのである。
- (58) なぜならば、これは汝より優れた千のインドラにおいて止まったのである。気まぐれなもの私を捨てて、汝のところに行つたのである、神の王よ。
- (59) インドラよ、再び、力をもつてはならない。静かに過ごすべし。(気まぐれなものは) そのような汝を捨てて、すぐに他に行くであろう。

[2 1 8 章] (=D. 2 2 5 章、8148-8186)

ビーシュマは言つた。

- (1) その時、百の祭式を行なう者インドラは、本来の姿をして輝くシュリー (吉祥) が偉大なバリの身体から外に出るを見た。
- (2) 威光によって輝くシュリーを見て、パーカを罰する至尊者インドラは、驚いて大きく目を広げ、バリに尋ねた。
- (3) バリよ、汝より離れ、光輝き、(美しき) 髪の房をもち³⁵、腕輪をつけ、自らの熱によって輝いて立っている者³⁶、これは一体誰か。

バリは言つた。

- (4) 私は、これがアスラの女なのか、女神なのか人間の女なのか知らない。汝自身でこれに聞くべし。あるいは聞かなくともよい。思うとおりにせよ、ヴァーサヴァよ。

インドラは言つた。

- (5) バリより離れ、光輝き、(美しき) 髪の房をもつ汝は誰か。(汝を) 知らない私に名前を告げるべし、明るく笑う者よ。
- (6) 自らの熱によって輝き、ダイトヤの主を離れて、幻のごとく立っている汝は誰か。美しき眉をもつものよ、それをありのままに私に語るべし。

シュリーは言つた。

- (7) ヴィローチャナは私を知らなかった。ヴィローチャナの息子バリは私を知らない。人々は、私をドフサハー (打ち勝ち難き者) と³⁷言ひ、そしてまたヴィディトサー (願望) ³⁸として私を認識したのである。
- (8) 人々は私を、ブーティ (幸福)、ラクシュミー (美) と言つた。また、シュリー (繁栄) とも言つたのである、ヴァーサヴァよ。インドラよ、あなたは私を知らない。あらゆる神々は私を知らなかったのである。

³⁵sikhaṅḍinī Ca. śikhaṅḍinī tanutarakeśavatafī Cp. unnatakeśabandhavatī Cv. ramyacūḍāvātī Deussen: Federbuschgeschmückte

³⁶tvattaḥ sthitā tvattaḥ (「汝より」) の語と前後の関連不明瞭。a 句の apakrāntā に関連させて理解した。

³⁷duḥsahā Cp. duḥsahā, yasya yogāt śātrūṅām duḥsaho bhavati, atha vā sarvair duḥkhena sahyate

³⁸vidhitseti Cp. vidhitseti ca yasyā yogāt kartum icchāyām satyām dakṣaḥ syāt Cs. labdhum iṣyata iti vidhitsā

インドラは言った。

- (9) ドフサハーよ、そのような（バリのところに）長く住んでいるあなたが、これ（バリ）を捨てるのは、私のためになのか、あるいはバリのためになのか。

シュリーは言った。

- (10) 創造者も維持者も私に命じることではできない。時が、進行によって（私に命じるのである）、インドラよ。インドラよ、これ（時）を蔑んではならない。

インドラは言った。

- (11) どうして、また何のために、バリはあなたによって見捨てられたのか、房の髪を持つ者よ。そして、どうしてあなたは私を見捨てようとししないのか、それを私に語るべし、明るく笑う方よ。

シュリーは言った。

- (12) 私は、真実に住している。そして、布施に、誓約に、そしてタパスに、また勇気にもダルマにも住している。バリはそれらに背を向けている。

- (13) 彼は、いつも信心深く、真実を語り、感官を制御していたが (bhūtvā)、(しかしその後、) 彼はバラモンたちを妬み、洗わない (不浄な) 手で祭式のバターに触ったのである。

- (14) 彼は、かつては祭式に専念していたが (bhūtvā)、(その後、) 「汝らはまさに私を祭るべし」と、(運命の) 時によって襲われた (? kālenopanipāḍita) 彼は、愚かにも世間の人々に宣言したのである。

- (15) 彼 (バリ) から離れ、インドラよ、私は、汝の中に住むであろう、ヴァーサヴァよ。不放逸によって、苦行と勇気によって、私は (汝において) 保持されねばならない。

インドラは言った。

- (16) 神々と人間には、またあらゆる生き物には、男 (pumān) が存在している³⁹。(どの) 男でも単独であなたを従わせることが (viśahitum) できるであろう、蓮を住み家とする者よ。

シュリーは言った。

- (17) 神であれ、ガンダルヴァであれ、アスラであれ、ラクシャサであれ、誰も単独で私を従わせることはできない、城砦の破壊者よ。

インドラは言った。

- (18) あなたは、私の中に永遠に住むべし。あなたが私に告げることを、その通りに私は行なうであろう。あなたは真実の言葉を語るべし。

シュリーは言った。

- (19) どのようにして私は汝の中に永遠に止まるのか、神の主よ、汝はこのことを聞くべし。ヴェーダに見られる規定に従って、私を四つに分割すべし⁴⁰。

インドラは言った。

- (20) 私はあなたを (ものの) 能力に従い力に従って、安置するであろう。しかし、私を去ることなかれ、常にあなたの近くにいる (tavāntike) 私を、ラクシュミーよ。

- (21) 人の中で、(ものを) 維持し、生き物を生み出す地、彼こそはあなたの (最初の) 四分の一を支えることができよう、なぜならばその能力があるから、というのが私の考えである。

シュリーは言った。

- (22) 地において支えられたこれが私の安置された最初の四分の一である。インドラよ、私の二番目の四分の一はそれよりよく安置されるようにせよ。

インドラは言った。

³⁹P. asti D. nāsti

⁴⁰śrīの4分割については、Gonda[Aspects] p.224 参照。

- (23) 人の中で、動きつつ奉仕する水、彼こそは、あなたの四分の一を支えることができよう。水には支える力がある（故に）。

シュリーは言った。

- (24) 水において支えられたこれが私の安置された第二の四分の一である。インドラよ、私の三番目の四分の一はそれよりよく安置されるようにせよ。

インドラは言った。

- (25) 神々、祭式、ヴェーダが支えられている火が、あなたの第三の四分の一をよく保たれた状態で維持するであろう。

シュリーは言った。

- (26) 火において支えられたこれが私の安置された第三の四分の一である。インドラよ、私の四番目の四分の一はそれよりよく安置されるようにせよ。

インドラは言った。

- (27) 人の中で、信心篤く真実を語るよき人々、彼等こそはあなたの四分の一を支えるであろう。よき人々は支えることができる（故に）。

シュリーは言った。

- (28) よき人において支えられたこれが私の安置された第四の四分の一である。このようにさまざまに安置された私を、インドラよ、生き物に向けよ (paridhatsva)。

インドラは言った。

- (29) もろもろの生き物のうち、ここで私が安置し存在するあなたを傷つける者がいれば、その者は私の敵となろう⁴¹。このように私の言葉を聞くべし。

ビーシュマは言った。

- (30) すると、シュリーに見捨てられたダイトヤの王バリは言った。「太陽は東に輝く限り、南方でも輝き、

- (31) 西方でも輝く。同様に北方においても輝く。そして日中に、太陽が沈む時⁴²、その時再び、神と悪魔との戦いがおこり、その時には私が汝らの勝利者となろう⁴³

- (32) 太陽が一箇所に止まって全世界を輝かす時⁴⁴、神々と悪魔の戦いにおいて私は汝に勝つであろう、百の祭式を行なう者よ。」

インドラは言った。

- (33) 私は、ブラフマンによって「汝は殺されるべきではない」と教示された。従って、私は、バリよ、汝の頭に金剛を放つことはないであろう。

- (34) 好きなどころへ行け、ダイトヤの主よ。汝に幸いあれかし、偉大なアスラよ。太陽は輝きつつも決して中央に止まることないであろう。

- (35) この者（太陽）の行動は (samaya) かつて自存者によって決められたのである。この者は、真実によって生き物を熱しつつ、永遠に進むのである。

- (36) その道は、北方六ヵ月であり、南方（の道）も同様（六ヵ月）である。太陽は、それによって、世界に冷たさと暑さを放射しつつ進むのである。

⁴¹P. dviṣyāt D. dhṛṣyas

⁴²P. sūryo 'stam eti D. sūryo nāstam eti Ca.p.: madhyam̐dine nāstam eti, na śāntakiradno bhaviṣyati, atyan-tatejomālī lokadhāyā bhāvī Cv. sūryo 'thāstam, udayam ārabhyāstamayaparyantam cakṣur dikṣu tapan sūryo yadā madhyam̐dine astam, prabhāyā alpatām eti tadā kāle / sa kālo viparītatvād asurajayakāla iti bhāvaḥ /

⁴³Hopkins は、「注釈者に従えば」としつつも、この叙述の背後に manvantara の考え方があると指摘している。(cf. Hopkins[1903]p.46.)

⁴⁴sarvāṃl lokān yadāditya ekasthas tāpayayiṣyati Deussen は Chānd. Up. 3.11.1 の参照を指示している。当該箇所は次のようであるが、用語上の関連は見られない。

atha tat ūrdhva udetya naivodetā nāstam etaikala eva madhye sthātā / tad eṣa ślokaḥ //

ビーシュマは言った。

- (37) このようにインドラに言われたダイトヤの王バリは、バーラタ族よ、南方に行き、城塞の破壊者は北方に行ったのである⁴⁵。
- (38) 以上のように、バリによって歌われた無私を特徴とする (anahamkārawsamjñitam) 言葉を聞いた後、千の目を持つ者 (インドラ) は、虚空に昇ったのである。

[219章] (=D. 226章, 8187-8211)

ビーシュマは言った。

- (1) ここで人々はこの古譚を語る。百の祭式を行なう者 (インドラ) とナムチとの対話を、ユディシュティラよ。
- (2) シュリーに見捨てられ、海のように動かず座っている、生き物の生成消滅を知る者⁴⁶(ナムチに) 城塞の破壊者は (次のように) 言った。
- (3) 縄で縛られ、地位を失い、敵に支配され、シュリーに見捨てられ、ナムチよ、汝は悲しむのか、あるいは悲しまないのか。

ナムチは言った。

- (4) 悲しみが達することのない⁴⁷ 身体が (悲しみのために) 苦しむ。敵どもは喜ぶ。悲しみには友はいない (?)⁴⁸。
- (5) それ故、インドラよ、私は悲しまない。この一切は終わりがあるのである。悲しみによって、姿は失われ、そして規範 (dharma) もまた (失われるのである)、神の王よ⁴⁹。
- (6) 気落ちより生じ来るその苦を除いて、内的善 (hṛdayam kalyāṇam) を認知する心をもって瞑想すべし。
- (7) いずれの仕方にせよ、人 (puruṣa) が心を善に向けるならば、その人にとって、あらゆる目的は達成されるのである。このことに疑いはない。
- (8) 師匠は一人であり、第二の師匠は存在しない。師匠は人 (puruṣa) が母胎に眠る時に教えるのである。彼によって教えられた私は、水が坂を⁵⁰流れるように、教えられた通りに振る舞うのである⁵¹。(cf. MBh. II. 57.8)
- (9) 私は、有と無とを認識しつつも、善をより重要なものと知っている。しかし私は、それを (善を) 行なわない。願望の中で法にかなった願望を、友人たちに対し、よく行ないつつも (?)⁵² (師匠に) 教えられた通りに、私は振る舞うのである。
- (10) この者にとって達成されるべきことが、現在達成されているにすぎない。将来起こるべきことが、起こっているにすぎないのである。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No. 5131. (2319).)
- (11) (人は) 創造者 (dhātṛ) が決定する母胎に繰り返し住むのである。自ら望む母胎にはない。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No. 5067.)
- (12) 「今到達したこの状態 (bhāva) は、私にとって必然である」というように、常にその人の状態 (を考える) 人、その人は決して迷うことはないであろう。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No. 4581.)

⁴⁵ dakṣiṇām āsām udicim tu Cs. dakṣiṇām āsām pātālam udicim svargam

⁴⁶ bhavābhavajñam Ca., Cn.: bhavābhavajñam utpattipralayajñam

⁴⁷ P. anavāpyam D. anivāryeṇa

⁴⁸ nāsti śoke sahayatā Cn. sahayatā śokasya duḥkhāpanode hetuvaṣṭ nāstīy athaḥ Cs. naṣṭasyaiśvaryādeḥ prāp-tau na śokaḥ sahakārī/

⁴⁹ P. dharmaś caiva sureśvara D. saṁtāpād bhraśyate śriyaḥ D. はこのあとに次の句を挿入している。
santāpād bhraśyate cāyur dharmaś caiva sureśvara

⁵⁰ pravaṇād Ca. pravaṇāt nimnāt nimnam uddiśyety arthaḥ / lyablope pañcamī N. pravaṇāt nimnadeśāt

⁵¹ vahāmi Buitenen: I flow wherever He orders me! (Buitenen[1975], p.134)

⁵² P. āsāsu dharmyāḥ suhrdām sukurvan D. āsāsu dharmyāsu parāsu kurvan

- (13) 人々は時の進行によって打ちのめされるのであり、(それ以外には)彼らを攻撃する者はいない。しかし、このことすなわち「敵が、『私は行為者である』と(誤って)考える」ことは苦には違いない。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No.3996, MBh.XII.220.33)
- (14) 世間における不幸は誰にも、聖仙にも、神々にも、偉大なアスラにも、三種のヴェーダに長じたる者にも、森に住む聖者にも訪れないことはない。しかし、高きものと低きものを知る人々は⁵³(不幸の訪れに)迷うことはない。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No.1338(513).)
- (15) 賢者は、怒らず、執着せず、落胆せず、喜ぶこともない。そして、本性として、ヒマラヤ山のごとく不動で、困難や不幸を悲しむことはない。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No.3330(1414).)
- (16) 最高の目的達成が喜ばせることなく、そしてまた、時に起きる不幸が当惑させることのできない、楽も苦も等しく適度に (madhyamaṃ) 過ごす人、その人が最もすぐれた人である。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No.5308(4836).)
- (17) 人 (puruṣa) は獲得したそれぞれの状態において、悲しむことなく楽しむべし。同様に、心に生じ、増大した、疲労をもたらす苦 (saṃtāpa) を身体から追い払うべし。
- (18) その座すなわち (? tatsadaḥ) 会合や集会の座について、集会に恐れをなさず⁵⁴、ダルマの真理に専心し、知恵を持ち、(ダルマの真理に?) 近づく人は、最も優れた人である。
- (19) 知恵ある者の行為は、従うのが難しい。知恵ある者は、迷うべき時に、迷わない。地位から追われたり、それほどひどい不幸に遭ってたとしても、長老たるガウタマは⁵⁵迷わないのである。
- (20) マントラの大きな力によっても、人間の英知によっても⁵⁶、死すべき者は、得られぬものを得ることはない。ここにいかなる嘆きがあろうか。
- (21) このように、生れた者に対してかつて創造者が⁵⁷定めたもの、それに私は後になるであろう。(そのような) 私に、死が何ができようか。
- (22) (人は、)獲得できるもののみを獲得し、行くべきところのみに行き、苦であれ、安楽であれ、到達できるものに到達するにすぎないのである。(cf. Böhlingk, Indische Sprüche, No.5831(4949).)
- (23) このように完全に認識した後、迷うことなく、苦と楽に習熟する者、彼こそはあらゆる富を自由にするのである⁵⁸。

(1999年9月24日 受理)

⁵³parāvarajñāḥ Cn. parāvarajñāḥ sadasadvastuvidāḥ Cs. suranarādikarmaparādhīnabhūtāḥ Deussen: das Höchst-und-Tiefste Böhlingk: die den Zusammenhang von Ursache und Wirkung kennen parāvāra の語は Muṇḍaka Up. 1.1.2, 2.2.9 (Deussen: 2.2.8) に見られる。

⁵⁴P. tatsadaḥ(tat sadaḥ) sa pariṣatsabhāsadaḥ prāpya yo na kurute sabhābhayam / D. na tat sadaḥ satpariṣat sabhā ca sā prāpya yāṃ na kurute sadā bhayam / P. と D. の読みは大きく異なっているが、いずれも最初の tat の内容が不明。この Bombay 版の詩節に関して、Hopkins は Defective Triṣṭubh の例として言及している。(cf. Hopkins[Great Epic] p.300) pariṣat については Manu.S.12.110-114 参照。

⁵⁵P. gautamas D. cottamas Cn. gautama iti pāṭhe, ahalyājārasya indrasya trapājananārthaṃ marmoddhāṇam / gautamasya ca dārāpahāre 'pi dhairyavarṇanam /

⁵⁶D. はこの後に次の句を挿入し、三行詩としている。

na śilena na vṛttena tathā naivārthasampadā /

⁵⁷dhātāraḥ Cs. dhātāra iti bahuvacanam pūjāyām /

⁵⁸P. kuśalāḥ sukhaduḥkheṣu sa vai sarvadhaneśvaraḥ D. kuśalī sarvaduḥkheṣu sa vai sarvadhano naraḥ